

# 自己有用感を高める支援の工夫

— 「自己有用感グロウアップナビ～認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積～」の  
作成と活用を通して —

長期研修員 大澤 久美子

## 《研究の概要》

本研究は、児童の自己有用感を高めることを目指した「自己有用感グロウアップナビ」を作成し、学級活動と校内研修において活用した。学級活動では、一か月程度の期間を設け、認め合い活動を繰り返し行い、児童が貢献と承認の思いを実感できるようにした。本時の後に「実践する期間」を設け、1人1台端末を用いて「いいねカード」を送り合い、児童同士の相互評価の蓄積をした。端末上に蓄積された本カードを見返す中で、自己の貢献や他者からの承認を繰り返し実感することで、児童の自己有用感が高まることを明らかにした。また、児童への関わり方に関する教師向けの資料を作成し、本資料を用いて校内研修を行うことで、教師が児童への関わり方を学び合い、児童の自己有用感を高める支援の一助とした。

**キーワード** 【教育相談 学級活動 自己有用感 貢献 承認 児童同士の相互評価】

群馬県総合教育センター

分類記号：F09-01 令和4年度 279集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

<各社の商標又は登録商標>

Google Jamboard は、Google LLC の商標又は登録商標です。

オクリンクはベネッセコーポレーションの商標又は登録商標です。

なお、本文中には ™ マーク、® マークは明記していません。

## I 主題設定の理由

令和4年12月に、文部科学省<sup>1)</sup>により示された「生徒指導提要（改訂版）」では、生徒指導の実践上の視点として、自己存在感を感受できるような配慮が必要であることを示し、『自分も一人の人間として大切にされている。』という自己存在感を、児童生徒が実感することが大切であることや「他者のために役立った、認められたという自己有用感を育むことも極めて重要」であることを述べている。また、集団づくりの基盤として、児童生徒が、「集団に貢献できる役割を持つこと」「集団での存在感を実感できること」「自己肯定感・自己有用感を培うことができること」を挙げ、教師が工夫して集団づくりを行う必要性を示している。

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター<sup>2)</sup>の生徒指導リーフ『『自尊感情』？それとも『自己有用感』？』（平成27年3月）では、「社会性の基礎となる『自己有用感』と述べている。さらに、「他者の存在を前提としない自己評価は、社会性に結びつくとは限らない」と述べ、集団活動の参加を通して、「進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇りの獲得が課題となります。」と示している。

研究協力校（以下、協力校）では、「Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）」を、年に2回行っている。令和3年度は、非承認群（教師や他の児童から認められていると感じる度合いが低い）に属する児童の割合は、学校全体の約17%であった。学級内で認められていると感じていない児童がやや多く、学年が上がるにつれて非承認群に属する児童が多くなる傾向が見られた。このことから、教師や他の児童から認められた経験や認められた実感が不足していたり、自己の有用性を感じるまでには至っていなかったりしていることが分かった。このような児童の実態を知り、教師は、児童一人一人が自分のよさやがんばりを発揮し、児童同士が互いに認め合える学級にしたい、そのための具体的な支援方法を知りたいと考えている。

これらのことから、児童の自己有用感を高めるために教師による集団づくりが必要であることが分かった。集団づくりでは、児童同士がよりよい人間関係を構築できるよう、児童相互が主体的に関わり、互いのよさを認め合える場の工夫が重要であると言える。「役に立った（貢献）」や「認められた（承認）」という実感を他の児童との関わりを通して得ることができるようにし、児童の自己有用感を高めたいと考えた。特に、他の児童から認められる経験を得られるような相互評価を行うことは、承認されたことを実感させ、「誰かの役に立ちたい」と次の行動に向かう意欲を向上させることも期待できる。また、1人1台端末の活用により、児童がその思いを自分なりの言葉、記号や絵文字などで表現しやすくなったり、他の児童の思いが見えやすくなったりすることは、存在価値や所属の意識を感じるきっかけとなる。さらに、1人1台端末を用いることにより、他の児童からの評価が蓄積されることで、自分の貢献に対する相手からの承認の様子が視覚化されたり、自分の取組を振り返ることが容易になったりし、自己有用感を実感できる場を増やすことが可能になる。これらのように、認め合い活動と児童同士の相互評価の場の工夫をすることで、人の役に立って嬉しい気持ちを感じたり、相手に認められて自信を得たり、誰かの役に立ちたいという思いを向上させたりし、児童の自己有用感を高める支援としていきたい。児童の自己有用感を高めることは、支え合いや助け合いが日常化した居心地のよい学級集団づくりを促し、不登校やいじめの未然防止となるだけでなく、児童の社会性を育成することにもつながると考えた。これは、今後、予測困難な時代を生きていく児童にとって、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く上で必要とする力につながると考え、本主題を設定した。

## II 研究のねらい

「自己有用感グロウアップナビ」の作成と活用を通して、学級活動を中心に、認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積を行うことは、児童に貢献と承認の思いを繰り返し実感させ、児童の自己有用感を高める支援となることを明らかにする。

### Ⅲ 研究の内容

#### 1 基本的な考え方

##### (1) 自己有用感を構成する要素について

栃木県総合教育センターの研究を参考に、他者と関わる中で得られる「他者のために役に立った」や「他者から認められた」という感覚を「自己有用感」と捉えることとする。ここでの「有用」とは、他者から見て「役に立つ、立たない」といった機能的な意味ではなく、児童が他者と関わる中で得られる実感を示すものとする。また、図1で示したように、自己有用感は、「貢献」「承認」「存在感」の三つの要素で構成され、「関係性」は自己有用感の獲得のために前提条件となるものとしている。この考えを基に、本研究では、「貢献」「承認」「存在感」の三つの要素を重視し、互いの要素が関連し合いながら自己有用感が高まっていくと考える。

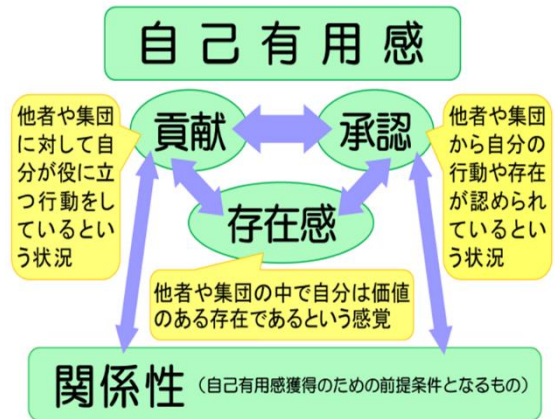


図1 自己有用感を構成する三つの要素  
(栃木県総合教育センターの研究を基に作成)

##### ① 貢献と承認の関連について

貢献とは、他者や集団に対して自分が役に立つ行動をしているという状況であり、承認とは、他者や集団から自分の行動や存在が認められているという状況である。まず、一人一人が学級内で貢献できる役割をもち、その役割に対する承認を得ることが大切となる。そして、承認された実感が高まることによって、他の児童や学級のために、更に貢献しようという意欲を得られるようになっていく。このような貢献と承認のサイクルを繰り返すことが、存在感や自己有用感を高めていくものとする。さらに、本研究では、貢献できたことを実感した児童は、自分が役に立って嬉しいと感じたり、誰かのために力を発揮できた達成感を得たりするようになり、承認された実感を得た児童は、他者から褒められたり感謝されたりしていることをより感じるようになっていく。

##### ② 存在感について

存在感とは、「自分は価値のある存在である」という感覚である。学級の中で役割をもって取り組んだり、教師や他の児童から認められたりすることにより、「役に立っている」「頼りにされている」「大事な一員だ」「信頼されている」という思いが高まり、児童が学級での自分の存在を肯定的に捉えるようになっていく。

##### (2) 自己有用感が高まることについて

前述のように、他者と関わる中で得られる「他者のために役に立った」や「他者から認められた」という感覚を「自己有用感」と捉えた。本研究では、「教師が児童を認める」ことから始まり、「児童が自分のよさやがんばりに気付く」「児童が他の児童のよさやがんばりに気付く」「児童と児童がそれぞれのよさやがんばりを認め合う」といった過程を経て、児童が自他のそれぞれのよさを知り、児童同士が関わり合いながら自己有用感の高まりを感じていくものと考えた。学級のために貢献したり、学級の他の児童から承認されたりする経験を重ねることで、児童は、自信や安心感を得ることができるようになる。そして、他の児童と進んで関わるようになることで、他者のために自分ができることをするようになったり、自分の意見や考えを相手に伝えるようになっていくと考えた。

##### (3) 認め合い活動について

本研究では、認め合うという視点で児童同士の関わりを促し、自己有用感を高めていく。児童同士が認め合うための素地となるように、まずは、日常の学校生活において教師が児童を認めていく。さらに、学級活動の一連の流れを「本時に向かう活動」「本時の活動」「実践する期間」「日常につなげる活動」とし、自己有用感が高まるそれぞれの過程に沿って、認め合う場として設定する(次ページ表1)。このように、認め合い活動を繰り返し行う中で、自分と他の児童のよさやがんばりに目を向ける力が身に付き、

さらに、多様な他の児童と関わることを好み、自他のよさを感じながら自分らしさを発揮しようとする態度を身に付けることにつながると考える。

表1 自己有用感が高まる過程と認め合い活動との関連

自己有用感が高まる過程	「認め合う」場の設定
教師が児童を認める	日常の学校生活
児童が自分のよさやがんばりに気付く	学級活動（本時に向かう活動）
児童が他の児童のよさやがんばりに気付く	学級活動（本時の活動）
児童と児童がそれぞれのよさやがんばりを認め合う	学級活動（実践する期間、日常につなげる活動）

#### (4) 児童同士の相互評価の蓄積について

児童同士が称賛や感謝の言葉を表現したカードのやりとりをしたり、児童のがんばりを掲示して学級の児童に見えるようにしたりする工夫がなされた実践は多くある。相互評価を行う際、これまでの多くが紙面上のやりとりや紙媒体の教材であったものを、本研究では、授業支援ソフトを活用することでデジタル化した。特に、児童同士の相互評価を行う場面において、他の児童を褒めたり他の児童に感謝したりした際の思いを、言葉や記号、絵文字などを用いて「いいねカード」に表現し（図2）、授業支援ソフトを活用して学級の他の児童とカードを送り合えるようにした。互いに送り合った「いいねカード」のデータが、1人1台端末に蓄積されることにより、自分に届いた他の児童からの「承認の思い」を、いつでも見返せるようになる。そして、「いいねカード」を見返す中で、自分が役に立てたことを思い出し、自信を得て、より多くの児童の役に立ちたいと考えたり、他の試みにも挑戦しようとしたりする気持ちが育まれていく。

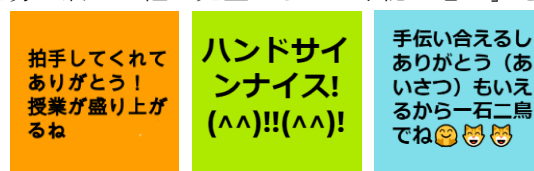


図2 「いいねカード」の例

## 2 教材の概要

### (1) 「自己有用感グロウアップナビ」の構成について

「自己有用感グロウアップナビ」は、「教師の関わり方編」と「学級活動編」の二つで構成した。「教師の関わり方編」には、児童が貢献と承認の思いを高めていくために教師と児童がよりよく関わる方法を示し、「学級活動編」には、児童と児童がよりよく関わりながら自己有用感を高めることをねらった学級活動指導例を示した。教師用端末にダウンロードをして日常的に活用できるように、目次や各ページから活用したいページに移動するようリンクを張った。

### (2) 「教師の関わり方編」について

「教師の関わり方編」には、児童が学級活動の学習を通して自己有用感を高めるための素地を養えるように、また、児童への関わり方や学級集団づくりに悩む教師のスキルアップとなるように、学校生活において教師と児童がよりよく関わる具体的な方法を示した。ここでは、「ポジティブワード」（児童が承認された実感を得るための支援）、「グッドチョイス」（児童が貢献できた実感を得るための支援）、の二つの構成とした。また、教材を作成するにあたり、教師自身が自己評価することを通して、児童に関わる様子を確認してもらえようと考え、「セルフチェックシート」を補助資料として添付した。

#### ① 「ポジティブワード」について

児童に承認された実感を促すための支援として、教師が肯定的な表現を用いて児童に関わるように作成したもので「具体的場面」と「言葉掛け」の二枚のスライドで構成した（次ページ図3）。

「具体的場面」のスライドには、授業中や給食中、休み時間など日常の学校生活を六つの場面に分け、それぞれの場面で教師が児童を褒めたり認めたりする際の具体的な言葉掛けの例を示した。「言葉かけ」のスライドには、感謝や労い、支持などの肯定的な表現を六つの視点に分け、教師の思いを児童に伝える際の具体的な言葉掛けの例を示した。

これらを活用し、児童を褒めたり認めたりする意識をもって教師が関わることで、児童は、他者から承認される経験を重ねることができると考えた。さらに、教師が児童に関わる姿が、他者を承認する思いを言語化するモデルとなり、学級活動において児童同士が相互評価をする際に、肯定的な表現を用いて承認し合うことにつながると考えた。

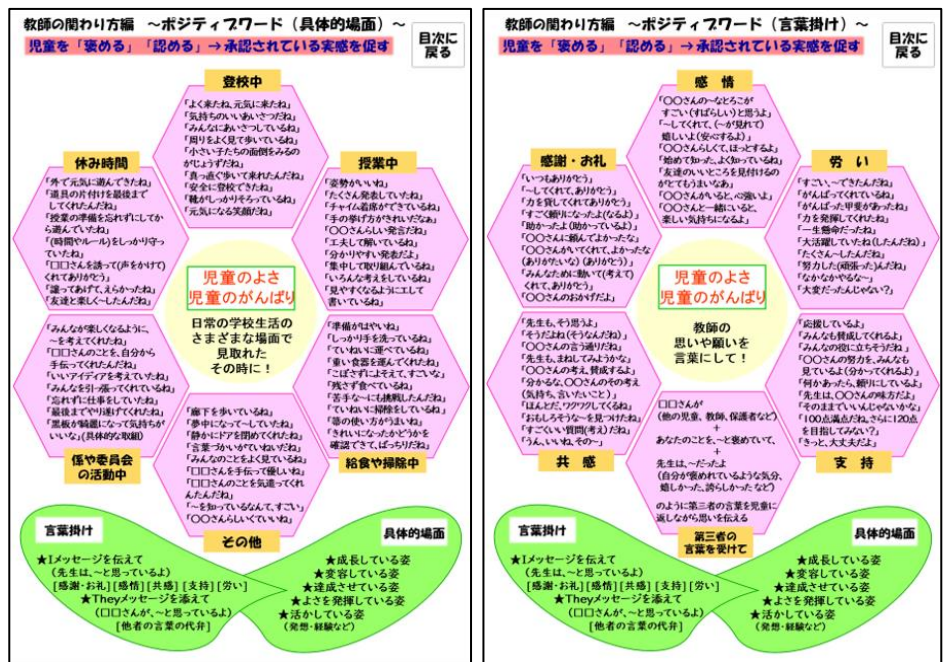


図3 「ポジティブワード(具体的場面)」(左)と「ポジティブワード(言葉掛け)」(右)

## ② 「グッドチョイス」について

児童が貢献できた実感を得るための支援となるように作成したもので、「グッドチョイス①(しかける)」と「グッドチョイス②(紹介する)」の二枚のスライドにより構成した(図4)。

「グッドチョイス①(しかける)」(以下、「グッドチョイス①」)のスライドには、児童が他者や学級のために貢献できることに気付くようになるための教師の関わり方について、四つの段階に分けて例示した。スライドで示しているように、日常の学校生活や学級活動の指導場面において、児童の実態を照らし合わせて教師が関わっていく。これにより、児童が自分のよさやがんばりに気づき、学級や他の児童のために貢献する姿のイメージをつかんだり、学級生活の中で自分にできそうな取組を決めたりできるようになると考えた。

また、「グッドチョイス②(紹介する)」(以下、「グッドチョイス②」)のスライドには、児童が他者や学級に貢献しようとする姿を広めるために教師がその姿を学級全体に紹介する方法について、四つの状態に分けて例示した。スライドに示しているように、日常の学校生活や学級活動の指導場面において、他の児童や学級に貢献している児童、他の児童のよさやがんばる姿に気付いた児童を学級全体で紹介する。これにより、児童が学級や他の児童のために



図4 「グッドチョイス①(しかける)」(左)と「グッドチョイス②(紹介する)」(右)

貢献することに自信をもち、意思決定した活動を実践しようとするようになる。さらに、他の児童から認められたことに焦点をおいて紹介することを通して、承認された実感を得ることができると考えた。

### ③ 「セルフチェックシート」について

「ポジティブワード」と「グッドチョイス」をどの程度活用したか、それにより児童がどのように変容したかを記録できるようにした。シートに数字を入力したり、プルダウンされた言葉の中から当てはまるものを選んだりすると、グラフに反映されるため(図5)、教師自身が児童への関わりを客観的に振り返る機会につながると考え、補助資料として添付した。

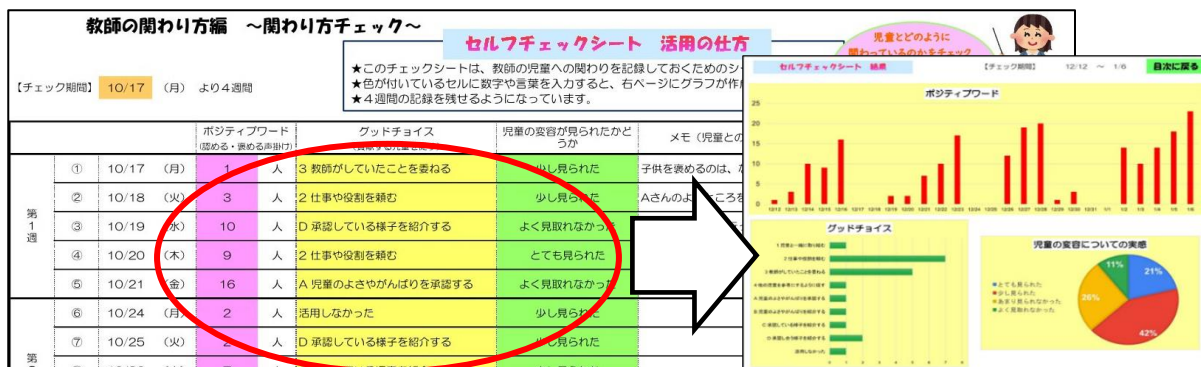


図5 セルフチェックシートとその結果が反映されたグラフ

### (3) 「学級活動編」について

「学級活動編」には、児童の自己有用感が高まることをねらい、認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積を取り入れた学級活動指導例として示し、学級活動指導案(表2)、1人1台端末を使用する際に背景として取り込む画像データ(以下、背景画像)、ワークシート、提示資料(教室内や黒板に提示する資料)を掲載した。これらを用いて、学級活動において教師が児童に支援することで、学級や他の児童に貢献しようとする態度を育成することができ、他の児童を承認する意識や他の児童から承認された実感を、より高めさせることにつながると考えた。

表2 各学年における学級活動の題材名

学年	内容	題材名
低学年	(2) イ	みんなでなかよく!
中学年	(3) イ	目指せ!楽しいクラス
高学年	(3) イ	学級力パワーアップ大作戦

#### ① 認め合い活動について

本研究では、学級活動の流れを、「本時に向かう活動」「本時の活動」「実践する期間」「日常につなげる活動」とし、児童同士が認め合えるように段階的に支援していく。まず、学校生活において、教師が児童のよさやがんばりを認めることで、児童同士による認め合い活動の素地となるようにする。学級活動では、「本時に向かう活動」において、学級の実態や目指す学級の姿について話し合うことを通して、自分の考えやよさに気付けるようにする。次の「本時の活動」では、交流を通して気付いた他の児童のよさやがんばりを伝えることで、児童が児童を認める機会となるようにするとともに、他の児童から認められたことを受け、学級や他の児童に貢献する取組を決められるようにする。次に、「実践する期間」において、それぞれの児童が取り組む様子を互いに見合い、1人1台端末を用いて「いいねカード」を送り合う活動を行うことで、他の児童から承認されたことが言葉として残るようにする。そして、「日常に向かう活動」では、学級や他の児童に更に貢献しようとして新たに意思決定した取組を紹介し合い、応援の言葉をワークシートに書き合うことで、児童同士が対面で認め合えるようにする。このように、学級活動において、認め合い活動を繰り返し行うことにより、児童の自己有用感の高まりをねらった。

#### ② 児童同士の相互評価の蓄積について

「実践する期間」において、2週間程度の期間を設け、短学活の時間を児童同士が相互評価する場とした。ここでは、児童が学級のために貢献しようと考えた取組を実践する中で、それぞれの児童が実践している姿を互いに見合い、その姿に対して、「いいねカード」を送り合うことで、児童同士が相互評価できるようにした。授業支援ソフトを用いることで、他の児童から届いた「いいねカード」が、1人1

台端末に蓄積される。児童は、蓄積された「いいねカード」を何度も見返すことができるため、他の児童から承認されたことを実感できる頻度が増え、自己有用感の高まりがより期待される。

### 3 研究構想図



## IV 研究の計画と方法

### 1 実践の概要

#### (1) 校内研修における実践

実践1	対象	研究協力校の全教師
	実践日	令和4年7月11日
	概要	「ポジティブワード」を用いて、日々の児童への関わり方を教師自身が振り返るとともに、児童への言葉掛けについてロールプレイを行った。
実践2	対象	研究協力校の若手の教師、第2・4・5学年を担当する教師
	実践日	令和4年8月23日、8月24日
	概要	「グッドチョイス」を用いて、学校生活や学級において児童が承認し合う様子を紹介する方法について、教師同士でロールプレイを行った。

#### (2) 学級活動における授業実践

実践1	対象・実践期間	研究協力校 小学校低学年（第2学年 49名） 令和4年10月25日～12月1日
	題材名	「みんなでなかよく！」
	ねらい	他の児童と仲よく生活することの大切さに気づき、学級が仲よくなるための行動を考え、実践しようとする意欲が高まるようにする。

実践 2	対象・実践期間	研究協力校 小学校中学年（第4学年 69名） 令和4年10月12日～11月18日
	題 材 名	「目指せ！楽しいクラス ～「お役立ち係」をやってみよう～」
実践 3	ね ら い	学級生活を楽しく豊かにする方法に気付き、自分のよさや得意なことを生かした係活動を考え、実践しようとする態度が身に付くようにする。
	対象・実践期間	研究協力校 小学校高学年（第5学年 76名） 令和4年10月12日～11月18日
実践 3	題 材 名	「学級力パワーアップ大作戦」
	ね ら い	学級生活の改善や向上のために取り組む意義を理解し、学級の一員として自分にできる作戦を考え、進んで取り組もうとする態度が身に付くようにする。

## 2 検証計画

検証の観点	検証の方法
「自己有用感グロウアップナビ」は、児童の自己有用感を高める支援のための教師向けの資料として有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師へのアンケート調査（7月、11月）</li> <li>・ワークシートやカードへの児童の記述（授業実践中）</li> <li>・授業実践を行った教師への聞き取り調査（11月）</li> </ul>
認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積を繰り返し行うことは、児童同士が貢献や承認をし合い、児童が自己有用感の高まりを実感できるようにするための有効な手立てであったか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふだん思っていることに関するアンケート」（7月、11月）（栃木県総合教育センターが作成したアンケートを活用）</li> <li>・ワークシートやカードへの児童の記述（授業実践中）</li> <li>・授業実践を行った教師への聞き取り調査（11月）</li> </ul>

## 3 実践

### (1) 「自己有用感グロウアップナビ」の「教師の関わり方編」を活用した校内研修における実践

#### ① 「ポジティブワード」の活用

協力校の多くの教師は、児童を認める言葉掛けをしているものの、全ての児童に対して認める言葉掛けをすることがなかなかできずいたり、掛ける言葉が限られてしまったりすることを課題としていた。そこで、「ポジティブワード」を示しながら、日常の学校生活や授業中における児童への肯定的な表現を用いた言葉掛けの方法について、事例を紹介した。普段の児童との関わりの中で、よく使用している表現、使用する頻度が少ない表現、自分自身が言われて嬉しい表現を確認してもらうことで、肯定的な表現を用いた言葉掛けをすることの意識が高まるように努めた。さらに、関わりが少ないと感じている児童を思い浮かべ、その児童に掛ける言葉を「ポジティブワード」を参考にしながら決め、児童役と教師役を交代しながら教師同士によるロールプレイを行った。

#### ② 「グッドチョイス」の活用

第2・4・5学年では、初任者をはじめ若手の教師が多く、認め合い活動の重要性を理解しているものの、どのように授業に取り入れるとよいのかと感じていた。特に、学級の全員の児童がよさを発揮できる場を設けることの困難さを改善したいと考えていた。そこで、児童一人一人が学級や他の児童に貢献できることに気付くことができるようになるための支援（「グッドチョイス①」）と、児童のよさがんばりを学級全体に紹介し、児童同士が承認し合う場を意図的に設ける方法（「グッドチョイス②」）を示し、活用目的や活用方法について共通理解を図った。さらに、「グッドチョイス②」に示している方法を参考にし、それぞれの教師のよさを他の教師に紹介し合うことで、学校生活や学級活動において、学級の児童がより認め合えることを目指したロールプレイとなるようにした。

### (2) 「自己有用感グロウアップナビ」の「学級活動編」を活用した学級活動における授業実践

学級や他の児童に貢献する場として、低学年では、学級の児童が仲よくなるためにできること、中学年では、学級生活をより楽しくするための係活動としてできること、高学年では、学級の課題の改善や学級のよさの向上のためにできることとし、実践を行った。意見交流や児童同士の相互評価を蓄積する際の授業支援ソフトとして、低学年ではオクリンクを、中学年と高学年ではGoogle Jamboardを用いた。









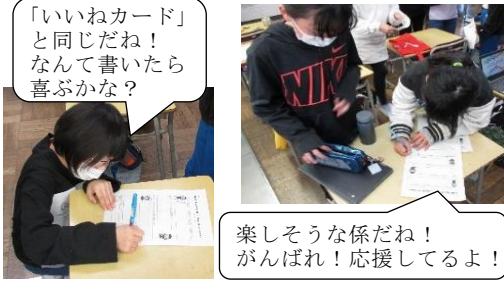

① 低学年の実践 「みんなでなかよく！」(第2学年)

時間	◆認め合い活動 ●児童同士の相互評価の蓄積		
	○学習活動	「教師の関わり方編」 を活用した教師の動き	「学級活動編」 にある資料
本時に向かう活動	<p>◆学級の実態や目指す学級の姿について話し合うことを通して自分の考えやよさを知る。</p> <p>○仲よしの表情に合う気持ちや台詞について交流し、「仲がよい学級の姿」のイメージを共有する。</p>  <p>なかよしは、このカードで「わくわく」しています。</p>	<p>「グッドチョイス② (C)」</p> <p>オクリンク上から好きなカードを選ばせ、選ぶことができた児童と選ばれた児童の両者を認めたり、相手カードのよいところを伝えている児童を紹介したりし、承認し合える雰囲気づくりをした。</p>	<p>「いいねカード」のとき、どんな気持ちかな？</p>  <p>気持ちや台詞を入力するカード</p>
本時の活動	<p>◆ワークシートを用いた交流を通して、気付いた他の児童のよさやがんばりを伝える。</p> <p>○学級が仲よくなるためにこれから取り組みたいことを決める。</p> <p>朝来たら、元気な声であいさつします！</p>  <p>休み時間にあそびにさそってなかよくなりたいです！</p>	<p>「ポジティブワード」</p> <p>今までの具体的な経験を発表した児童を褒めたり、自分で活動を決められたことを認めたりして、貢献する気持ちになるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C, D)」</p> <p>他の児童の発表を聞いて応援している児童を紹介し、承認し合うよさを感じるようにした。</p>	<p>みんなでなかよく！</p>  <p>「なかよし」になるための取組を記入するワークシート</p>
実践する期間	<p>●オクリンクを活用して「いいねカード」を送り合い、互いに承認の言葉を伝え合う。</p> <p>○仲よくなるための活動を実践する。</p> <p>○児童同士で「いいねカード」を送り合う。</p> <p>絵をかいたら、よろこんでくれるかな？</p>  <p>つなげて電車にしよう！</p> 	<p>「ポジティブワード」</p> <p>実践している児童を見取り、応援したり認めたりした。</p> <p>「グッドチョイス② (A, B)」</p> <p>実践している児童の様子を学級に紹介し、貢献できた気持ちを確認されるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C)」</p> <p>他の児童のよさを書いている児童や、工夫のあるカードを送っている児童を紹介し、様々な承認の仕方に気付けるようにした。</p>	<p>れつこの子、れつこの子、おなじはんの子</p> <p>カードを送る相手を示した掲示</p>  <p>カードを送る約束を示した掲示物</p>
日常につなげる活動	<p>◆新たに意思決定した取組を紹介し合い、応援をする言葉をワークシートに書き合う。</p> <p>○学級が更に仲よくなるためにがんばりたいことを決め、紹介し合う。</p> <p>〇〇さんの考えは、～なところがいいと思います！</p>  <p>みんなをあそびにさそって、クラスがもっと仲よくなるようにするよ。</p>	<p>「ポジティブワード」</p> <p>取り組んできたよさを伝え、貢献できたことを味わえるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (A, B)」</p> <p>カードを貰った感想を具体的に書いている児童を紹介し、承認されたことを感じられるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C, D)」</p> <p>褒め合ったり、拍手を送り合ったりしている児童を紹介し、承認し合うよさを感じられるようにした。</p>	<p>みんなでなかよく！</p>  <p>今後の取組を記入するワークシート</p>

【児童の感想】

- ・朝、学校にきたら、大きい声で元気よく、自分から「おはよう！」と言えるようになった。
- ・休み時間に、自分から鬼ごっこに誘って遊んだから、クラスのみんなとなかよしになれた。
- ・みんな、楽しみに待っているかな？どんな反応をするのかな？と思いながら「いいねカード」を送った。
- ・みんなに「いいねカード」を送ることができて、自分のことが好きになった。
- ・みんなから届いた「いいねカード」を読むのが、とても楽しくて、いい気持ちになった。
- ・自分に届いた「いいねカード」を見て、自分は、こんなことをいつの間にかできていたんだと思った。
- ・自分の「はたらき」を見てもらっているみたいで、うれしかった。
- ・「みんな、すごいな！」と思ったし、「自分もがんばらなきゃ！」と思った。


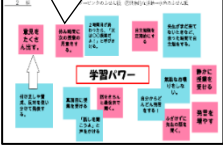
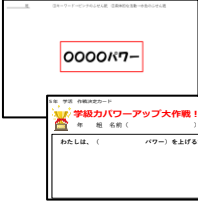
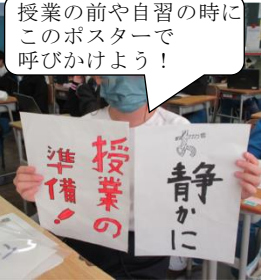

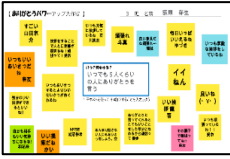


② 中学年の実践 「目指せ！楽しいクラス ～『お役立ち係』をやってみよう～」（第4学年）

時間	◆認め合い活動 ●児童同士の相互評価の蓄積		
	○主な学習活動	「教師の関わり方編」 を活用した教師の動き	「学級活動編」 にある資料
本時に向かう活動	<p>◆学級の実態や目指す学級の姿について話し合うことを通して自分の考えやよさを知る。</p> <p>○楽しいクラスにつながるキーワードや係活動のアイデアについて意見交流する。</p>  <p>「楽しいクラス」ってどんなクラスかなあ？</p>	<p>「グッドチョイス② (B)」</p> <p>他の児童が考えたアイデアに賛成したり、称賛したりしている児童を紹介し、承認しようとする雰囲気づくりをした。</p>	 <p>楽しいクラスについて交流する際の背景画像</p>
本時の活動	<p>◆1人1台端末を用いた交流を通して、気付いた他の児童のよさやがんばりを伝える。</p> <p>○取り組みたい係活動の内容を決定し紹介し合う。</p> <p>どんな活動をしようかなあ？</p>  <p>メッセージカードをみんなにプレゼントします。</p>	<p>「ポジティブワード」</p> <p>係活動の内容を思い付いた児童を認めて、貢献できそうなことに気が付けるようにした。</p> <p>「グッドチョイス① (2, 3)」</p> <p>これまでに見取った児童のよさやがんばりが発揮された取組を伝え、貢献できる取組に気付くことができるようにした。</p>	 <p>交流する際の背景画像(左)、決めた取組を記入するワークシート(右)</p>
実践する期間	<p>●Google Jamboardを活用して「いいねカード」を送り合い、互いに承認の言葉を伝え合う。</p> <p>○お役立ち係の活動を実践する。</p> <p>○児童同士で「いいねカード」を送り合う。</p>  <p>イラスト教室楽しかった！ありがとう♪</p> <p>イラスト教室をして、みんなを楽しませよう！</p>	<p>「ポジティブワード」</p> <p>実践している児童に肯定的な言葉掛けをし、自信をもてるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (A, B)」</p> <p>実践している様子を紹介し、貢献できたことを感じられるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C)」</p> <p>肯定的な言葉を用いている児童や相手のよさを多く書いている児童を紹介し、様々な承認の方法があることに気付けるようにした。</p>	 <p>「いいねカード」の背景画像</p>
日常につなげる活動	<p>◆新たに意思決定した取組を紹介し合い、応援をする言葉をワークシートに書き合う。</p> <p>○学級が更に楽しくなるようにするために、これからがんばりたい取組を紹介し合う。</p> <p>「いいねカード」と同じだね！なんて書いたら喜ぶかな？</p>  <p>楽しそうな係だね！がんばれ！応援してるよ！</p>	<p>「ポジティブワード」</p> <p>アイデアのよさや承認し、新しい取組に意欲的になれるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (A, B)」</p> <p>「いいねカード」を貰って意欲的になった児童を紹介し、貢献できたことをより感じられるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C, D)」</p> <p>活発に応援し合っている児童の様子を再現させ、承認し合うよさに気付けるようにした。</p>	 <p>今後の取組を記入するワークシート</p>

【児童の感想】

- ・給食で飲んだ牛乳パックをたたんで欲しいことを書いたポスターを作って、教室に貼ったら、その後からほぼ全員の人が、たたんで片付けてくれるようになって、みんなの役に立てたと感じた。
- ・誕生日カードを作って渡したら、前よりもみんなと話す事が多くなって友達が増えた。
- ・届いた「いいねカード」を見ると、自分もみんなのために頑張ったんだ、自分はすごいんだ、と思った。
- ・「いいねカード」を読むと、わたしのことをほめる言葉が書いてあったり、「一緒にやろう！」と誘ってくれたりしているのが分かって、こんな友達がいるとよかったです。
- ・みんなのいいところやその子のがんばっているところを思い出しながら「いいねカード」を送った。
- ・いろいろな人の性格や意見が分かった。前よりもみんなとの距離が縮まって仲よくなった気がする。

③ 高学年の実践 「学級カパワーアップ大作戦！」(第5学年)

時間	◆認め合い活動 ●児童同士の相互評価の蓄積		
	○主な学習活動	「教師の関わり方編」 を活用した教師の動き	「学級活動編」 にある資料
本時に向かう活動	<p>◆学級の実態や目指す学級の姿について話し合うことを通して自分の考えやよさを知る。</p> <p>○学級の実態やパワーアップさせたい学級力について意見交流する。</p> <p>どの学級力をパワーアップさせようか？</p> <p>学習パワーをアップさせてクラスをよくしようよ！</p> 	<p>「グッドチョイス② (B)」</p> <p>具体的に伝え合っている班の様子を紹介し、他の児童の考えを受け入れることができるようにした。</p>	
本時の活動	<p>◆1人1台端末を用いた交流を通して、気付いた他の児童のよさやがんばりを伝える。</p> <p>○自分にできそうな大作戦の内容を決定し紹介し合う。</p> <p>学習パワーをアップさせるためには何ができるかな？</p>  <p>みんなが発表した後にハンドサインをして、自分の考えを伝えてみようと思う！</p> 	<p>「ポジティブワード」</p> <p>具体的に作戦を考えている班を認める言葉掛けをし、自分の班の考えのよさに気付くようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C, D)」</p> <p>一人一人が決めた作戦に対し、応援し合ったり励まし合ったりしている児童たちの様子を紹介し、他者のよさを見付けようとする雰囲気づくりをした。</p>	 <p>作戦内容について交流をする際の背景画像(左)、作戦内容を記入するワークシート(右)</p>
実践する期間	<p>●Google Jamboardを活用して「いいねカード」を送り合い、互いに承認の言葉を伝え合う。</p> <p>○パワーアップ大作戦を実践する。</p> <p>○児童同士で「いいねカード」を送り合う。</p> <p>授業の前や自習の時にこのポスターで呼びかけよう！</p>  <p>どんな言葉を送ったら喜んでくれるかな？</p> 	<p>「ポジティブワード」</p> <p>作戦を実行している児童を認め、承認されたと感じられるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (A, B)」</p> <p>作戦を実行している児童を紹介して感想を尋ね、貢献できたことに自信をもてるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C)」</p> <p>相手が喜ぶような言葉でカードを作成している児童を紹介し、承認する様々な言葉に気付くようにした。</p>	 <p>「いいねカード」の背景画像</p>
日常につなげる活動	<p>◆新たに意思決定した取組を紹介し合い、応援をする言葉をワークシートに書き合う。</p> <p>○学級力が更に向上するために実践したい作戦を決定し紹介し合う。</p>  <p>誰かが発表したら、拍手をしたり、意見を加えたいと思う！</p>  <p>とてもいいと思うよ！がんばってね！</p>	<p>「グッドチョイス② (A, B)」</p> <p>カードの送り合いにより気持ちの変化を感じた児童に、その内容や理由を伝えさせ、承認されることのよさを感じられるようにした。</p> <p>「グッドチョイス② (C, D)」</p> <p>応援や助言をし合っている児童の様子を紹介し、承認し合うよさを感じて、更に貢献したいと思えるようにした。</p>	 <p>今後の作戦を記入するワークシート</p>

【児童の感想】

- ・自分から挨拶をすると、みんなが返してくれてクラスが明るくなった。挨拶は大事だと思った！
- ・ハンドサインを、そうじの反省会や普通の会話で使うように、みんなに提案できた。
- ・「いいねカード」が増えていくと、自分が成長した気分になれて、嬉しかった。
- ・「がんばれ！」「楽しみにしているよ！」というメッセージが届いて、作戦をする勇気になった。
- ・今までは、他の子のことを気にしなかったけれど、相手のいいところを見付けるのは楽しいと思ったから、これからは、他の子のがんばっているところをたくさん見付けたい。
- ・今までクラスの人からの「ありがとう」を感じる事があまりなかったけれど、みんなと「いいねカード」を送り合ったから、今は、みんなからの感謝の気持ちがよく分かる。

## V 研究の結果と考察

### 1 「自己有用感グロウアップナビ」は、児童の自己有用感を高める支援のための教師向けの資料として有効であったか。

協力校において、実践した教師を対象に、実践を通して得た教師自身の気づきや、児童の変容について、尋ねたところ、以下のような回答があった。

- 児童にとっても自分にとっても、相手を認める言葉を知る機会になった。
- 新たな自分のよさを知ることができたり、学級の一員としての自覚が生まれたりした児童が増えた。
- これまでに比べて、いつもより意識して児童の行動を認める場面を設けるようになった。
- 教師が児童を認めるだけではなく、児童同士の認め合いに着目して、その様子を学級全体に紹介することにも意識を向けられるようになった。
- 児童がこんなにも人のために動けることに驚いて、たくさん褒めるようになった。
- 学級活動における「本時に向かう活動」「本時の活動」「実践する期間」「日常につなげる活動」の流れが、「役に立ちたい」や「見てもらいたい」という児童の意欲を高め、他の児童との関わりを確認することにつながった。
- Google Jamboardを用いた意見交流は、児童の考えを残すことができるため、教師にとっても児童にとっても、その児童がどのような考えをもっているかを知ることができた。
- 「いいねカード」が自動的に蓄積されるので、すぐに見ることや後で見返すことができよかった。

教師の回答を見ると、児童を認めることについての回答が多い。これは、「教師の関わり方編」で、児童への肯定的な表現を用いた言葉掛けや児童のよさやがんばりを学級全体に広める方法を具体的に示したため、児童の貢献や承認の姿を細かく見取る意識をもちながら児童と関わる教師が増えたと考える。特に、「グッドチョイス②」に示した、児童同士が認め合う様子を学級全体に紹介する方法は、認め合い活動を取り入れることを課題としていた教師に、認め合い活動を意図的に設定する上で、有効であったと考える。

「学級活動編」の学習指導案には、「本時に向かう活動」「本時の活動」「実践する期間」「日常につなげる活動」のそれぞれの過程において、児童の活動や教師の動きを具体的に示したり、実際に用いるワークシートや予想される1人1台端末上の交流の様子などを載せたりしたため、全体を見通しながら指導できたと考える。特に、「教師の関わり方編」の「ポジティブワード」と「グッドチョイス」を、どの場面でどのように活用するのかについて具体的に示した。これにより、



図6 教師が学級全体に向けて児童を承認する

教師が認め合い活動のイメージをつかみ、児童同士が認め合う姿を意図的に促すことと同時に、教師自身も児童を承認する場を増やしていったと言える（図6）。さらに、1人1台端末を用いて「いいねカード」を送り合う活動を行ったことが、蓄積されていく児童の「いいねカード」を、時間や場所を選ばずに見ることを可能にした。これにより、児童のよさやがんばりに係る話題が学年の教師の間で増え、児童を承認しようとする教師の意識をより高めることにつながった。（図7）。



図7 児童を承認し合う教師

さらに、実践後、数週間経ってから追加の聞き取り調査を行うと、他の児童を気に掛けて言葉を掛ける児童や気付いたことを進んで行う児童、他の児童のよいところを見つけて相手に伝えている児童など、自己有用感が高まったことによる児童の変容を感じている教師が多くいた。これらのことから、「自己有用感グロウアップナビ」は、児童の自己有用感を高める支援をねらった教師向けの資料として有効であったと考える。

2 認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積を繰り返し行うことは、児童同士が貢献や承認をし合い、児童が自己有用感の高まりを実感できるようにするための有効な手立てであったか。

自己有用感に関する調査として、栃木県総合教育センターが作成した「ふだん思っていることに関するアンケート」を実践の前後で実施し、自己有用感を構成する要素である「貢献」、「承認」、「存在感」のそれぞれの項目ごとに児童の変容を考察した。値は、十分に高い状態を5としたときの、学年の児童の回答の平均値であり、左が実践前、右が実践後の結果を示している。

低学年の結果を見ると、学級への貢献の値が0.30ポイントと大きく上昇した(図8)。これは、「本時の活動」で、学級に役立つ活動についての話をていねいに行い、貢献するイメージを具体的にもたせて自分が取り組む活動を意思決定させたことが、学級のためにがんばろうとする実践意欲を高めたと考える。さらに、他の児童から届いた「いいねカード」を見返す中で、自分が実際に取り組んだ活動を再確認することができ、「がんばれた」や「学級のために活動できた」といった達成感を得ることにつながったと考える。

一方、中学年と高学年の学級への貢献に関する結果は、上昇してはいるものの、大きな変化は見られなかった(図9、図10)。中には、実践後に値が下がった児童も数名いた。「自分が楽しいからといって、みんなが楽しいわけではない(中学年の児童)」や「みんなのために、もっと工夫して取り組めればよかった(高学年の児童)」など、相手を意識しながら学級への貢献の度合いを自己評価する児童もいた。このことから、貢献する活動について、「相手のため」という視点で見直す場を設けるなど、学級により役立てた実感を促す支援も必要であったと考える。

中学年と高学年の結果を見ると、学級からの承認、先生からの承認のいずれも3.8ポイントを超えており、特に、高学年の結果が大きく上昇したことが分かる(図9、図10)。教師の中には、「自己有用感グロウアップナビ」の「教師の関わり方編」に沿って、児童の様子や成果物を事前に記録しておき、その児童に肯定的な言葉掛けをしたり、その児童を学級全体に紹介したりしていた。中学年や高学年として当たり前だと考え見過ごしがちな姿も、教師が意図的に見取り、認めたことで、児童が承認された実感を獲得することにつながったと言える。

また、児童同士の相互評価として、「いいねカード」を送り合う活動では、ICT機器の特性が活かされ、多くのカードを送り合えた。児童のワークシートに「自分から声を掛けられるようになった」や「あまり話さなかった子と会話が増えて仲よくなった」といった感想があった。このことから、他の児童をよく見ようとする意識や他の児童から見てもらえているという安心感が生まれたと言える。

このように、「貢献」と「承認」の視点で児童同士が関わるようになったことで、児童の自己有用感は図11のように変化した。どの学年の児童の自己有用感も実践後の結果が向上していることが分かる。学級活動の「本時に向かう活動」「本時の活動」「実践する期間」「日常につなげる活動」のそれぞれの過程で、認め合い活動を取り入れたことで、児童が貢献と承認の思いを得る経験を重ねることができた。

さらに、他の児童と「いいねカード」を送り合ったことに対し

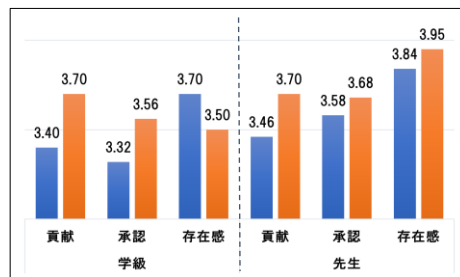


図8 低学年(第2学年)の結果

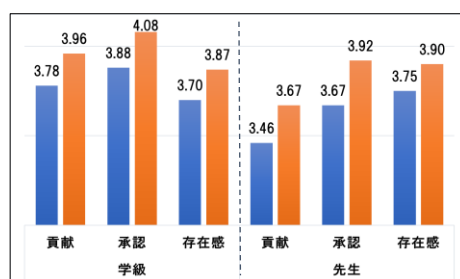


図9 中学年(第4学年)の結果

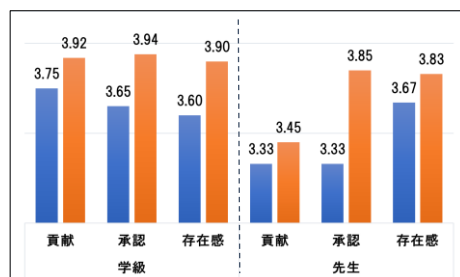


図10 高学年(第5学年)の結果

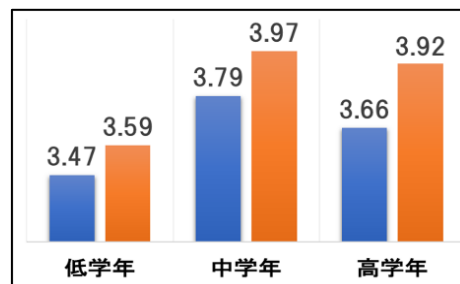


図11 各学年の学級での自己有用感

て、「カードが増えると自分が成長したように感じる」や「言葉で伝えるよりも伝えやすいから、たくさん送れる」や「みんなもがんばっているから、自分ももっとできることをしたい」といった感想があった。このように、カードに書かれた言葉に勇気をもったり、自信や安心感を得たりした児童は、更に貢献しようと意欲的になり、その姿を他の児童と承認し合うようになったと言える。

これらのことから、認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積を繰り返し行ったことは、児童が自己有用感の高まりを実感できるようにするための有効な手立てであったと言える。

## VI 研究のまとめ

### 1 成果

- 「自己有用感グロウアップナビ」の「教師の関わり方編」で、教師による肯定的な表現を用いた児童への言葉掛けの方法や児童のよさやがんばりを学級全体に広める方法を例示したことは、学校生活や学級活動において、児童が貢献や承認を実感させるための、教師の支援となることができた。
- 「自己有用感グロウアップナビ」の「学級活動編」で、「本時に向かう活動」「本時の活動」「実践する期間」「日常につなげる活動」の一連の過程に、認め合い活動を繰り返し取り入れ、ICT機器の特性を生かして児童同士の相互評価の蓄積を行ったことは、児童に貢献と承認の思いを実感させ、児童の自己有用感を高めることができた。

### 2 課題

- 児童の自己有用感を更に高めるために、認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積を年間指導計画に位置付けたり、学校行事と関連させたりし、継続して取り組めるように工夫していく必要がある。
- 相手と対面して思いを伝えることに抵抗があるものの、承認の思いを伝えるよさを感じた児童がいることが分かった。このことから、児童の実態に合わせた教師の関わり方も例示するなど、「自己有用感グロウアップナビ」の改善や工夫が必要である。

## VII 提言

「自己有用感グロウアップナビ」を活用し、学校生活や学級活動において、認め合い活動と児童同士の相互評価の蓄積を繰り返し行い、児童が自己有用感の高まりを実感できるようにしていくことが大切である。

### <引用文献>

- 1) 文部科学省(2022) 『生徒指導提要(改訂版)』
- 2) 国立教育政策研究所(平成27年) 『生徒指導リーフ『自尊感情』?それとも『自己有用感』?』  
文部科学省

### <参考文献>

- ・ 栃木県総合教育センター(2013) 「高めよう!自己有用感 栃木の子ども現状と指導の在り方」  
センター出版
- ・ 国立教育政策研究所 教育課程センター(2019) 「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)」 文部科学省
- ・ 安部恭子(2021) 「特別活動で学校を楽しくする45のヒント」 文溪堂
- ・ 田中博史(2014) 「子どもが変わる接し方」 東洋館出版社
- ・ 若松俊介(2021) 「子どもが育つ学級をつくる 『仕掛け』の技術」 学陽書房

### <担当指導主事>

山田 雅之 田所 由美子